

8月27日(土曜日)の朝が来た。大連に来て4日目である。本日もまた抜けるような青空である。今日は桜美林大学の留学生であった“于士淇”さんと長春で再会する日である。彼女は昨年卒業し、今は生まれ故郷の長春に帰って就職している。日本語は読み書きとも素晴らしい。彼女も一人っ子なのでご両親は手元に置きたかったのかもかもしれない。大連に出発する前に〈微信(中国版LINE)〉で大連旅行をする旨を伝えると、「是非長春に来てください。案内したいところがあります。」ということで長春への旅を予定に組み込んだ。長春は、大連で仕事をしていた2年間で2度行ったことがある。有名な観光名所、例えば偽満州国皇宮博物院、旧日本軍が建てた建物群、南湖公園、李香蘭が主演の映画を数多く製作した撮影所などである。彼女の言う案内先はまだ行ったことのない「浄月潭」であったので楽しみにしていた。

長春には「高鉄(中国版新幹線)」に乗って行ったが、高鉄の印象について述べておきたい。私の乗った大連駅発の高鉄は9時15分発で途中5駅に止まり長春駅には12時48分に着く予定である。“予定”としたのは中国のあらゆる交通機関はおおよそ定刻通りに運行しないからである。3年前ハルビンに行った時、定刻前に出発した高鉄に乗ったときは流石に驚いた。(ただし時間に鷹揚なのは中国だけ

の話ではないけれども) 料金は316元(当時のレートで約5千円)である。大連駅から長春駅間は約700kmある。たとえば東京―新潟間は330kmで、料金は片道約1万円かかる。日本の新幹線と比べれば格段に安い。中国国内のすべての高鉄に乗ったり見たりしたわけではないが、どの高鉄も車体は汚れの目立つ白色で「和階号」と書かれて変わり映えない。路線により形やデザインを変えるという発想は無いのであろうか。いろいろ変えれば「トリ鉄」が喜んで中国に写真を撮りに来るのではなかろうか。ハルビンが終点のこの路線は、大連駅をスタートすると平原の中を殆どとうもろこし畑とポプラの防風林が続くが、風景に変化がなくすぐ飽きてしまう。車内は綺麗で網棚もあり、トイレは飛行機と同じような構造で、他の急行や普通列車の設備とは格段に違う。欠点をあげるとすれば、どの高鉄の窓ガラスも車体も汚れていて気になる。なぜ自動洗車機を設置し汚れを落とさないのか不思議である。清掃するだけでイメージはかなり良くなるのにと高鉄に乗るたびに思う。

私の乗った高鉄は、珍しく定刻どおりに12時48分に静かにホームに止まった。しかし折角定刻通りに到着したのに彼女を見つけるまでが一苦勞であった。事前にお互いの服装まで微信で確認していたのに……。高鉄から降りて乗客がぞろぞろ歩く方向についていくとそのうち広いコンコースに出た。多くの人々が行き交っていた。切符は記念にもらえるので改札口はないであろうとは思っていたが、東京駅の「銀の鈴」のような出迎えの人と出会える場所があるだろうと簡単に考えていたのだ。長春駅はとにかく大きな駅になっていたと思う。なにしろ7年振りなのである。地下鉄、軽軌電車、バス、タクシーなどの標識はあちこちにあるが一体どこに行けば会えるのか皆目見当がつかない。会えなければ微信で交信すればいいと、これまた簡単に考えていたが駅構内はWi-Fiが使えると



浄月潭で于士淇さんと



丘の上にロケット発射台のような展望台があった。

ころがない。駅員に聞いても要領を得ない。スムーズに長春まで来たのに会えず仕舞いで大連に帰る羽目になるのか、という不安が脳裏をよぎった。それでもと気を取り直し、コンコースを行ったり来たりするうちによやく于士淇さんにバッタリ出会った。お互いホッと胸をなでおろした。

于さんは、まず昼食を、と言ってマイカーに乗るように勧めた。彼女は「中国はどこに行っても車の運転が乱暴ですが、中でも長春は乱暴です。」と笑いながらも上手に車の流れに乗って、とある中華料理店に連れて行ってくれた。とても美味しい料理を食べながら積もる話が続いた。食後目的地に車を走らせ、浄月潭正門横の駐車場に着き30元の入場券を買って中に入った。

ここで浄月潭の紹介をしたい。場所は、長春市浄月観光経済開発区にあり、市の中心部から12km離れたところにある。面積は実に83平方キロメートルで東京ドームの6400倍、といってもピンと来ないくらい広大である。中国最大の人工森林公園であり、国家5A級観光地である。なぜ浄月潭という名称がついたかといえば、公園内に大きなダムが造られたわけであるが水を蓄えた後の形状が月の形であったためという。「潭」という字は辞典によれば、〈深い水たまり、よどみ、淵〉等と出ている。正門から10分くらい歩いたところに巨大な堤防があり、何十段もの石段を登って堤の上に立つと目の覚めるような光景が広がるのだ。藍色の澄んだ広々とした湖が空の青さと一体となってまるで別世界である。〈深い水たまり〉といった光景ではない。

台湾に行かれた方は、島の中部に「日月潭」という有名な観光地をご存知と思う。浄月潭は、この日月潭と姉妹潭と称されているそうだ。昭文社発行のガイドブックによれば、「日月潭」は約200年前に狩りをしていたツォウ族の若者たちが偶然に発見したとされる山上の湖だそうである。海拔748mにあり、周囲24km・面積11.7km²で水深は30mのこちらは天然湖である。周囲を1000～2000m級の山々に囲まれ、霧が立ち込める朝夕は幻想的であるそうだ。名前の由来は、この地を訪れた清朝の将軍が湖面に浮かぶ光華島を指さし、「北側は日輪の如し、南側は月輪の如し」と語ったことからと言う。湖の形を地図で確認したが、どう見ても日輪や月輪に見えない形をしているのであるが……。余談になるが霧の日月潭は一度見てみたいが、それより私が見てみたいのは日月潭の南岸にある「玄奘寺」である。この寺には西遊記でも有名な玄奘三蔵の遺骨の一部が安置されているという。これは、1955年(昭和30年)に日台友好のためにさいたま市にある慈恩寺から分骨されこの寺に奉安されているとのこと。

話を前に戻すと、堤の先の丘の上にロケット発射台に似た一風をなす展望台があるのでそこに行くことにした。最上階からの人工林と湖水が地平線まで広がる眺めはまた格別で今日一日を感謝した。だいぶ陽が傾いて夕日が湖面を照らし始め、我々はこの光景を脳裏に焼き付けながら出口に向かった。于さんは、「帰りは長春駅から一つ大連寄りの長春西駅に送りますが、その途中で夕食を取りましょう」と言って有名な「東方餃子王」に連れて行ってくれた。なぜこの店を選んだかを尋ねると、「中国では昔から、〈上車餃子、下車面〉と言います。これから高鉄に乗られるのでこのお店にしました」と説明してくれた。中国・東北地方の習慣のようであるが、餃子の美味しかったのは言うまでもない。お土産に月餅までいただいた(中秋節は9月15日)。長春西駅からの高鉄は20時11分発の切符が取れたので再会を約して別れた。大連北駅には23時17分に到着し、そしてホテルに着いた時は翌日になっていた。(続く)